

ディケンズのたくらみ

—— ギヤスケルの『北と南』のタイトルをめぐる ——

渡 部 智 也*

1. はじめに—ディケンズとギヤスケル

チャールズ・ディケンズとエリザベス・ギヤスケル—19世紀イギリスヴィクトリア朝を代表する二人の作家の接点は、『ハウスホールド・ワーズ』(*Household Words*) と呼ばれる週刊誌であった。1850年3月30日に刊行されたこの雑誌は、ディケンズ自身が経営、編集、そして一部記事の執筆をおこなうという、まさにディケンズのダイナミズムを体現するような雑誌である。この雑誌を刊行するにあたり、執筆者の一人としてギヤスケルの参加を強く望んだ彼は、1850年1月31日付けで、彼女宛てに次のような執筆依頼の手紙を書いている。

I do not know what your literary vows of temperance or abstinence may be, but as I *do* honestly know that there is no living English writer whose aid I would desire to enlist, in preference to the authoress of *Mary Barton* (a book that most profoundly affected and impressed me) [. . .]. If you could, and would prefer to speak to me on the subject, I should be very glad indeed to come to Manchester for a few hours, and explain anything

* 福岡大学人文学部講師

you wish to know. My unaffected and great admiration of your book, makes me earnest in all relating to you. (6 : 22)

『メアリ・バートン』の作者（＝ギヤスケル）ほど執筆陣に加えたい人はいないと最上級の賛辞を贈り、必要とあらばマンチェスターまで説明に伺う、とさえ述べるこの手紙の文面からは、すでに大作家として名声を得たディケンズが、駆け出しの作家ギヤスケルに対して三顧の礼を尽くして迎えようとする姿が浮かび上がってくるだろう。彼はなおも洩るギヤスケルを説得し、なんとか彼女による記事の執筆、寄稿にこぎ着ける。このディケンズの、ギヤスケルになんとしても記事を書いてもらいたい、という熱意、さらには実際に雑誌が刊行されたとき、その巻頭を飾ったのがギヤスケルの小説『リジー・リー』 (*Lizzie Leigh*) であったという事実は、ディケンズが彼女の小説家としての才能を高く評価していたことの証左と言えよう。この『リジー・リー』を筆頭に、ギヤスケルは数々の小説、記事をこの雑誌に寄稿している。¹ この点で、『ハウスホールド・ワーズ』は両者を結びつける触媒の役割を果たしたと言ってよい。しかしその一方で、この雑誌は彼らの対立を生む温床ともなった。というのも、編集長としてのディケンズはギヤスケルの作品執筆にたびたび介入をおこない、それに対してギヤスケルが強い不快感を覚えたためである。この両者の対立は、これまで主として家父長制を体現する編集長ディケンズと、その圧制に抵抗する女性作家ギヤスケルという、いわゆるジェンダー論の枠組みで論じられることが多かった。しかしながら、そのような大きな視点ではかえって抜け落ちてしまうものがあるように思われる。本稿では、ディケンズによるギヤスケルの執筆活動への介入の一事例として挙げられることの多い、『北と南』 (*North and*

¹ Sally Ledgerによると、1850年から亡くなる1865年までの間にギヤスケルは40の物語と記事を執筆しているが、そのうちディケンズとの関係を通じて出版されたものは3分の2にものぼるといふ (247)。

South) のタイトル変更につながる対立の問題を取り上げ、この介入事件の背景に、一作家としてではなく、雑誌の編集長としてのディケンズの〈たくらみ〉が存在する可能性を示したい。

2. 『マーガレット・ヘイル』から『北と南』へ

本論に入る前に、まずは問題となる出来事について考察し、本稿で扱う疑問点を明確にしておきたい。雑誌『ハウスホールド・ワーズ』は、基本的にはエッセイや社会問題を扱った記事で構成されていたが、読者を引きつけるための目玉として、短い小説も掲載されていた。順調な滑り出しを見せたこの雑誌は、しかし 1853 年に入り、売り上げを落としていく。当初は半年あたり 900 から 1,300 ポンドの収益を記録していたものが、1853 年の半ばには下落し、同年 9 月までの半年間の利益はわずか 527 ポンド 15 シリング 10 ペンスにまで落ち込んでしまった (Patten 244)。この苦境を脱すべく、ディケンズは 1854 年 1 月より新しい長編小説の執筆に着手し、同年 4 月から 8 月に渡り、同誌に『辛い時代』(*Hard Times*) を連載した。この小説はディケンズとしては珍しく、舞台をロンドンではなくイギリス北部の架空の工業都市コークタウンに設定し、そこで暮らす労働者スティーヴン・ブラックプールの苦難、さらにはそういった産業問題を生み出す根底にある、功利主義に基づく事実・数字偏重教育への批判が展開されるといった内容で、社会小説的側面を強く持つ作品となっている。本小説に対する批評家の評価は大きく分かれているものの、この作品の連載によって雑誌の売り上げが大きく回復したことを考えれば (Patten 246)、当時は少なからず人々の心を捉えたものと思われる。しかしディケンズは、自らの小説の連載だけでは雑誌の売り上げを増強する上で不十分と考えたらしい。彼は自身の作品の連載に続いて気鋭の女流作家エリザベス・ギヤスケルの小説を連載することを決め、1854 年 1 月の段階で、彼女に執筆依頼の手紙を

出す（7：235）。その後、彼女が提出した草稿に満足した彼は、6月17日付けの彼女宛ての手紙で、原稿に満足した旨、さらに、週刊誌に長い小説を掲載するためにはどのように物語を分割していけば良いかというアドバイスを送っている。アドバイスと言えは聞こえは良いが、“According to the best of my judgment and experience, if it were divided in any other way [. . .] it would be mortally injured.”（7：355）と言って区切り方の例を提示し、「私にすべて任せてもらえれば、うまくやってみせる」と述べており、実質的には作品の分割をすべて編集者である自分に委ねるようという〈要求〉とも解釈できる。そのため、これを両者の本作品をめぐる対立の火種ととらえることも可能であろうが、本稿で扱いたいのはその点ではない。重要と思われるのは、この手紙の最後でディケンズが、“Have you thought of a name?”（7：356）と、小説のタイトルについて尋ねている点である。続けて、“I cannot suggest one without knowing more of the story”（7：356）と述べており、この時点では作品のタイトルについて、彼にも考えがないことが窺える。この手紙に対するギヤスケルの返信は残っていないが、続く7月2日付けの彼女宛ての手紙の中でディケンズが、“Margaret Hale is as good a name as any other”（7：363）と述べていることから、ギヤスケル自身は『マーガレット・ヘイル』という、主人公の名前をタイトルに据える形を考えていたことが分かる。ところがその後、7月26日付けの手紙においてディケンズは、作品の草稿についてのさらなる感想を述べるとともに、突如として、“North and South appears to me to be a better name than Margaret Hale”（7：378）と述べて、小説のタイトルを変更してしまう。この新しいタイトルが、ディケンズによる創作なのか、水面下でギヤスケルが代案として提示し、それにディケンズが賛同したということなのか、あるいは副編集長ウィルズなど別の第三者による提案なのかは定かではない。しかしながら、これ以後タイトル変更の議論はおこなわれておらず、おまけに直後のウィルズ宛ての手紙の中で、『北と南』というタイトルで広告を出すよう

指示が出ていることから（7：380）、ディケンズのこの判断がタイトルにまつわる最終決定となったのは間違いない。言い換えるならば、ディケンズのこの決定によって、ギヤスケルが当初提案した『マーガレット・ヘイル』というタイトル案は棄却され、『北と南』という全く印象の異なるタイトルを冠した作品が、『ハウスホールド・ワーズ』に掲載されることとなったのである。

興味深いのは、ギヤスケル自身はこの新しいタイトルをあまり気に入っていなかったと思われることである。その証拠に、彼女は友人に宛てた手紙の中で、本小説のことを『北と南』とは呼ばず、ただ“Margaret”と呼称している。² また連載が終わりに近づいた12月17日付けのディケンズ宛ての手紙の中で、彼女は、“I think a better title than N. & S. would have been ‘Death & Variations.’”（324）と述べて、現タイトルへの不満を表明している。しかし、これに続く、翌1855年1月27日付けの手紙においてディケンズは、ただギヤスケルが作品を完結させたことをねぎらうのみで、タイトルへの彼女の不満については一言も言及していない（7：513-14）。このように、本小説のタイトルをめぐる、編集長ディケンズと執筆者ギヤスケルとの間には明らかな温度差が感じられるのである。

このタイトルをめぐる対立に関する疑問点は、およそ次の問いに集約されよう。すなわち、なぜディケンズは当初賛意を示した『マーガレット・ヘイル』というタイトルをやめ、『北と南』というタイトルで小説に掲載することを決めたのであろうか？ 次章で、この疑問に対する答えを導き出すことを試みる。

3. ディケンズのたくらみ

なぜディケンズはタイトルの変更を決めたのか？ まず思い浮かぶのは、もっ

² たとえば友人であるナイチンゲールに宛てた1854年10月30日付けの手紙の中で、彼女は“I shall send you ‘Margaret’ as soon as I get home”（322）と述べている。

とも単純な説、すなわちこれが単なるディケンズの思いつきというものであろう。だがそれは考えにくい。というのも、ディケンズは作品のタイトルに非常にこだわる作家だからだ。たとえば前章で名前を挙げた『辛い時代』の執筆開始時、彼は14種類のタイトル候補を親友ジョン・フォースターに送り、どれが良いかと相談している(7:254)。また、彼の最後にして未完の作品となった『エドウィン・ドルードの謎』(*The Mystery of Edwin Drood*)に至っては、実に17種類にも及ぶタイトル候補を挙げて吟味した上で、最終的なタイトルを決めている(Jacobson 15)。このように、タイトルへのこだわりを人一倍持った作家である以上、『マーガレット・ヘイル』から『北と南』へのタイトル変更の提案も、何らかの意図が込められたものと考えた方がより自然であろう。ではその意図とは何か?そこで最初に考察したいのは、作品の草稿を読むにつれてディケンズが、別のタイトルの方がより正確に作品内容を反映していると感じるようになった可能性である。ギヤスケルの草稿は現存しておらず、ディケンズが目にした草稿と、実際に『ハウスホールド・ワーズ』に掲載された小説とがどの程度違っているかは定かではない。しかしながら、ギヤスケルに宛てた手紙の中でディケンズがおこなっている作品内容への言及や、その後の手紙などから判断すると、少なくとも作品の前半に関しては、草稿段階と大きく異なることはないように思われる。その草稿であるが、最初に作品のタイトルについて尋ねた1854年6月17日付けの手紙で、彼はマーガレットが病気で寝ているベッシーの元を訪問し、そこを離れる場面まで言及している(7:355)。これは後の単行本版の章区分で言えば、第1巻11章にあたり、必然的にディケンズはこの段階で第1巻1章から11章までの物語を読んでいることが分かる。また、「タイトルは『マーガレット・ヘイル』で良いのでは」と述べた7月2日付けの手紙では、具体的な作品内容への言及こそないものの、ピルグリム版 *Letters* の編者たちが分析しているように、この段階でディケンズはおおよそ13章までの草稿を読んでいると考えられ(7:363n)、これらを総合するこ

とで、少なくともディケンズが第1巻13章までの内容に基づいて『マーガレット・ヘイル』というタイトルで良いと判断したことが窺える。この間の物語内容はというと、マーガレットのいとこのイーディスの結婚に始まり、友人ヘンリー・レノックスによるマーガレットへの求婚と拒絶、さらに父ヘイル氏による「良心に基づき、牧師を辞めねばならぬ」という告白と、それに伴う一家の、南部の田舎町ヘルストンから北部の工業都市ミルトンへの移住などが語られており、作品の中心はあくまでマーガレットおよび彼女の家族という印象を受ける。そのため、この段階でディケンズが主人公マーガレット・ヘイルの名前をタイトルとすることに同意したというのはごく自然なことのようと思われる。

一方、続いてディケンズがタイトルの変更を主張した7月26日付けの手紙では、彼は単行本版の第1巻14章から22章にあたる部分を読んでいることが示唆される（7：377-78）。そしてこれらの章で語られる内容は、第15章でソーントン氏の訪問の際に議論となる、工場所有者と労働者との対立の問題や、第17章で労働者ニコラス・ヒギンズが語るストライキの話、さらには第22章における労働者の暴動と、ソーントンをかばったマーガレットが投石を受ける事件など、にわかに社会問題が中心に取り扱われているような印象を与えるものとなっている。そのため、ここに至ってディケンズが、この物語を単にマーガレット・ヘイルという個人に関する物語というよりも、社会における対立を描いた物語として読んだ方がより適切だと捉えたとしても、不思議ではないように感じられるだろう。

『北と南』というタイトルそれ自体は、第8章でヒギンズがマーガレットに投げかける台詞、“North and South has both met and made kind o’ friends in this big smoky place”（73）に基づいている。そしてこの台詞を目にした読者が感じるのは、南部の田園地帯からやってきたマーガレットと、北部の工業地帯出身のヒギンズのコントラストである。実際、この台詞の前後では、北部と南部の慣習の違いに戸惑うマーガレットの姿が描かれている。従って、『北と

南』というそれ自体が対称性、〈対立〉を内包するタイトルは、社会における〈対立〉を扱った物語にふさわしいと考えることもできる。

しかしながら、物語内容だけを理由にタイトル変更を求めたという解釈には疑問が残る。というのも、確かに第14章以降の物語展開からは社会問題が多く扱われているような印象を受けるが、これはあくまで作品の一側面にすぎず、マーガレット一家に関する個人的な問題も、社会問題に負けず劣らず描かれているからである。たとえば第14章は、マーガレットと母が、反逆罪の汚名を着せられて国外追放を余儀なくされている兄フレデリックについて話す場面で占められているほか、第16章では母の病気の話、第18章以降はソーントンの家で開かれるディナーに招待される話など、彼女に関わる話題も非常に多く描かれている。また社会問題が扱われる際でも、あくまで話題の中心にいるのはマーガレットだということも無視できない。たとえばソーントンとヒギンズ、相反する立場の二人がそれぞれストライキ、労働問題について語る場面が描かれるが、その際に彼らの話に反応し、意見を述べるのは常にマーガレットであるし、ストライキに伴う暴動が勃発した際、暴徒の投げた投石を受けてけがを負うのは、病気の母の苦痛を和らげるために、ソーントンからウォーターベッドを借りようとたまたま彼の家を訪問していたマーガレットなのである。このような観点からこれらの章を概観すると、必ずしも社会小説の要素が強まっているとは思われないだろう。

そもそもギヤスケルはこの作品を、社会問題を取り入れつつも、あくまでマーガレットに焦点を当てた〈個人の物語〉として書こうとしていたように見受けられる。前章で述べたように、友人に宛てた手紙の中で本作に言及する際、彼女は『北と南』というタイトルは用いず、ただ『マーガレット』と呼称している。また、後に別のタイトル案として彼女は『死と変奏』を挙げているが、これはマーガレットと関わり合いのある5名の登場人物の死に言及したもので、明らかに個人を中心に据えたタイトルである。このようなギヤスケルの姿勢が

らは、一貫してこの物語を〈個人の物語〉として執筆したいという意思が感じられる。そして作品内容も、社会小説的な要素が徐々に増えていくとはいえ、個人の物語としての側面は決して弱くなく、物語の展開だけを理由にディケンズが社会小説らしいタイトルを付けた方がより本作にふさわしいと考えたと主張することは難しいであろう。

このように、ディケンズがタイトルの変更を主張した背景には、単なる物語展開を超えた動機が存在すると思われる。そこで考えたいのが、ディケンズがこの小説を〈社会小説として読んだから〉ではなく、〈社会小説として読ませたかったから〉タイトル変更を求めた、という可能性である。ディケンズは本小説を社会小説として読ませるために、社会小説らしいタイトルをつけるようなタイトルの変更を要求したのではないだろうか。このような観点からこの問題を検討すると、興味深いことが窺える。というのは、このギヤスケルの小説を社会小説として読ませることが、雑誌『ハウスホールド・ワーズ』の目的と奇妙に合致しているのだ。同雑誌の趣旨について、ディケンズは雑誌第一号の巻頭に掲載された「刊行の辞」（“A Preliminary Word”）の冒頭で、次のように述べている。

We seek to bring into innumerable homes, from the stirring world around us, the knowledge of many social wonders, good and evil, that are not calculated to render any of us less ardently persevering in ourselves, less tolerant of one another, less faithful in the progress of mankind, less thankful for the privilege of living in this summer-dawn of time [. . .] to teach the hardest workers at this whirling wheel of toil, that their lot is not necessarily a moody, brutal fact, excluded from the sympathies and graces of imagination ; to bring the greater and the lesser in degree, together, upon that wide field, and mutually dispose them to a better acquaintance and a

kinder understanding—is one main object of our Household Words.(1)

この文章からは、社会に溢れる善悪様々な問題を取り上げ、世に広く知らしめること、さらには、地位の高いもの、低いものにより良く優しい相互理解をもたらすことを、この雑誌の一つの目的としていることが読み取れる。換言すれば、社会問題を積極的に扱うことで苦しむ人々について広く知らしめ、彼らへの共感を喚起することそれ自体が、『ハウスホールド・ワーズ』の主目的なのである。そして様々な社会問題の中でも、ディケンズが自身の作家としてのキャリアを通じて関心を持ち続けたのが、過酷な環境に置かれた労働者の問題であった。彼は1838年の段階で、マンチェスターの工場労働者達の様子を見学し、彼らの置かれた劣悪な環境に怒り、“I mean to strike the heaviest blow in my power for these unfortunate creatures” (1:484) と決意表明をおこなっていた。そしてそれが実行に移されたのが、『辛い時代』なのである。

最初に決意表明をおこなってから十数年後のこの時期に、ディケンズが労働者の問題、産業問題を扱った作品を書いたのには、社会背景の影響も大きい。1853年から54年にかけて、イギリス北部ランカシャー州の町プレストンで、大規模なストライキ、およびロックアウトが発生し、世間の注目を集めていた。ディケンズは、1854年1月28日に、副編集長ウィルズとともにプレストンの視察をおこない、その上で、この出来事を扱った記事「ストライキ中」(“On Strike”)、そして『辛い時代』を執筆したのである。³このように、当時彼の頭の中では労働者の問題への関心が大きな位置を占めていたと考えられる。そのような状況下で、自身の小説の「後継作品」(“successor”; 7:363)にすると決めていたギヤスケルの小説の草稿を読んでいたディケンズは、読み進めるにつれて、この小説が『辛い時代』と同じように労働者の問題を取り扱っている

³ プレストンのストライキとロックアウトに関する詳細、およびディケンズの現地取材の内容については、青木健(56-60)が詳しい。

ことを強く感じた。⁴そこで、自身の小説とギヤスケルの小説とを結びつけることで『ハウスホールド・ワーズ』誌上に労働者の問題に関する言説空間とも呼ぶべきものを生み出し、それによってこの問題を広く世に知らしめようと考えたのではないだろうか。この目的を果たすためには、読者にギヤスケルの小説を、あくまで労働者の問題を扱った社会小説として読んでもらう必要がある。しかし、肝心の小説のタイトルが『マーガレット・ヘイル』という個人名を冠し、しかも物語の冒頭がそのマーガレット個人をめぐる話に終始していたのでは、この物語を社会小説として読むよう読者を促すことは難しい。そこでディケンズは、ギヤスケルの小説のタイトルを、『マーガレット・ヘイル』から『北と南』という、それ自体が対立を内包するタイトルに変更させることで、この作品を社会小説として読むように読者を誘導したのではないだろうか。

このように考えることができるのは、ディケンズが様々な手段を用いて、作品の社会小説的側面を強調しているように思われるためである。たとえばディケンズは、1854年8月19日付けのウィルズ宛ての手紙で翌月の『北と南』の連載開始に触れ、作品冒頭にテニソンの“Will Waterproof’s Lyrical Monologue”からの引用を載せるようにと指示しているが、これはピルグリム版 *Letters* の編者たちが指摘しているように、社会的な和解という作品テーマを強調する役割を果たしている（7：398n）。また、『辛い時代』と『北と南』とを関連づけ、それによって作品の持つ社会小説的要素を強調している点も見逃せない。ここで注目したいのが、両者の連載の間に位置している記事、「一般に知られていないこと」（“It Is Not Generally Known”）である。ディケンズ執筆によるこの記事は、『北と南』連載開始号の巻頭記事として掲載され、あたかも『北と南』

⁴ ディケンズは元々、ギヤスケルが社会小説的色彩の強い作品を執筆しようとしていることは知っていた。そのため、彼女がディケンズも『辛い時代』の中でストライキを扱うつもりでは、と不安がっていると知り、1854年4月21日に、「私は作中でストライキを用いないので、心配しないでください」（7：320）と彼女を安心させる手紙を送っている。しかし、彼女の作品の具体的な内容について彼が理解したのは、彼女の草稿を読んでからと考えられる。

の序文のような位置を占めている。⁵そしてその中身は、以下の引用に見られるように、労働者ヨブ・スミスの苦難と、そのような労働者の苦境を生み出す社会批判に満ちている。

Sloggins warmly recommends that all Theatres be shut up for good, all Dancing Rooms pulled down, and all music stopped. Considers that nothing else is people's ruin [. . .] Consequently, all the five and twenty, in five and twenty honest and sincere reports, do severally urge that the requirements and deservings of Job Smith be in nowise considered or cared for; that the natural and deeply rooted cravings of mankind be plucked up and trodden out; that Sloggins's gospel be the gospel for the conscientious and industrious part of the world; that Sloggins rule the land and rule the waves; and that Britons unto Sloggins ever, ever, ever, shall - be- slaves.

I submit that this great and dangerous mistake cannot be too generally known or generally thought about. (52)

この中でディケンズは、まじめな労働者ヨブ・スミスではなく、墮落した人物スロッキンズを基準として法が定められ、それによってヨブ・スミスが苦しめられていると主張し、社会の不正と労働者の苦難を訴えている。注目すべきはその例として、労働者にとって有害という理由で、全ての劇場や舞踏場、音楽会が禁止され、ヨブ・スミスは安らぎを得ることが出来ない、と述べられている部分である。この表現は、彼が前月まで連載していた『辛い時代』に登場するサーカス団団長スレアリーの非常に有名な台詞、「人間は楽しみがなくちゃなんねえ」(“People mutht be amuthed”; 41, 272) を想起させる。おそらく

⁵ 「一般に知られていないこと」は、1854年9月2日号の49ページから掲載されており、『北と南』は61ページから掲載されている。

記事を目にした読者は、少し前まで愉しんでいたディケンズの小説に登場するこの台詞を思い出したことだろう。⁶ 重要なことは、このような位置に『辛い時代』を思わせる記事が掲載されているのが単なる偶然の産物ではなく、ディケンズの意図によるものだということである。この記事についてディケンズは、1854年8月2日付けのウィルズ宛ての手紙の中で、“I will endeavour to [. . .] do an opening paper for the starting No. of North and South.”（7：384）と述べ、その5日後の手紙でこの記事について、「一般に知られていないこと、と題するつもりだ」と述べている（7：392）。つまり、彼はこの記事が『北と南』の序文のような役割を担うことになる、ということを理解した上で、意識的に関連のある話を持ってきたのである。ディケンズは編集長として、記事の内容から掲載の順序、さらには記事の合間に載せる広告の文面まで、自分でチェックした上で事細かに指示を出していた人物である。実際、ウィルズ宛ての複数の手紙からは、どの作品を何ページから掲載し、どういった文面の広告を入れること、記事と記事の順番を入れ替えること、といった細かい指示を見て取ることができ、編集者としてのディケンズの緻密さが窺える。⁷ そのように記事の順序や内容に注意を払っていたディケンズであれば、当然、似たような内容の記事と記事とが組み合わさることで生じる効果についても十分理解していたであろう。ディケンズは意識的に、前月まで連載されていた『辛い時代』との関連を想起させるような記事を、『北と南』の少し前のページに掲載することで、これから読者が読む小説を、労働者の抱える問題を扱った社会小説として読ませようとしたのではないだろうか。⁸

⁶ この台詞は『辛い時代』を理解する上でも非常に重要な台詞であり、作品の前半と後半の二度登場することで、読者に強いインパクトを与える。しかも、そのうち二度目に登場するのは、同小説の連載最終号（1854年8月12月号）においてであり、読者から見れば、この台詞がまだ記憶に比較的強く残っている状態で、この記事に出くわすことになるのだ。

⁷ たとえば1854年8月12日付け（7：395-96）、および8月19日付け（7：398）の、それぞれウィルズに宛てた手紙が参考になる。

⁸ 加藤匠もまた、この「一般に知られていないこと」が『辛い時代』と『北と南』とを

単行本化された小説と異なり、雑誌に連載された小説の場合、その雑誌に他にどのような記事が掲載されているか、あるいは、その雑誌にそれまでどのような記事、小説が掲載されていたか、という問題は無視できない。読者はそれらの関連する記事や小説を踏まえた上で、作品に対して解釈を与えていくからだ。ディケンズはそのことをよく理解した上で、編集者としての立場を利用して、労働者の抱える問題を提起するという言説空間を誌上に構築したのである。『北と南』のタイトル変更は、そのような編集長ディケンズのたくらみの一端を表す出来事として捉えるべきものなのではないだろうか。

すでに指摘したように、従来『ハウスホールド・ワーズ』への寄稿をめぐるディケンズとギヤスケルの対立については、〈家長長的な〉編集長ディケンズと〈女性〉作家ギヤスケルという、ジェンダーの枠組みで捉えられることが多かった。たとえば Eileen Gillooly は同じく『ハウスホールド・ワーズ』に連載された『克蘭フォード』(Cranford)において、ギヤスケルはユーモアを用いて〈父〉ディケンズと男性の権威に立ち向かっていると論じている(905-6)。確かに、ディケンズのギヤスケルに対する手紙の文面からは、娘に宛てた父の手紙を思わせるところが少なくない。⁹そのため、ジェンダーの観点からなる批評にも一理ある。しかしながら、父と娘、著名な男性作家と駆け出しの女性作家、という以前に、『ハウスホールド・ワーズ』をめぐる両者には立場の大きな違いがあることを無視してはいけないうらう。ディケンズは、自身の主宰する雑誌の編集長である。一方でギヤスケルは、そこに寄稿する小説(および記事)の執筆者である。つまり、雑誌全体に対して責任を持つ編集長と、雑誌の中の一部、自分の記事に対して責任を持つ執筆者という違いがあるのだ。

結びつけ、読者に読みの方向性を与える役割を果たした可能性について言及しているが、タイトル変更に関しては、ディケンズによる執筆活動への介入の一例として挙げるのみで、この問題と結びつけた考察はおこなっていない(58-59)。

⁹ 長瀬久子は雑誌をめぐる両者の関係について、「終始強い父と成長する娘の関係を思わせるものがある」と指摘している(577)。

前者は雑誌そのものがよりよいもの、その目的とするところに近づくことを目指し、後者は自身の記事がよりよいものになることを目指す。この異なる責任と目的を持つ両者が、各人の役割をもっとも的確に果たそうと試みた結果生じたのが、この『北と南』をめぐる対立なのである。これはどちらが正しい、あるいは間違っている、という類いのものではない。ただ、両者がそれぞれの立場を通して最善を尽くした結果、起こるべくして起こった、いわば必然の産物なのである。

4. おわりに—32 ギニーの意味

以上、本稿では雑誌『ハウスホールド・ワーズ』に連載されたギヤスケルの『北と南』のタイトルをめぐるディケンズとギヤスケルの対立とその理由について考察した。ディケンズがタイトルの変更を要求した背景には、自身の小説『辛い時代』と『北と南』とを結びつけ、労働者の置かれた過酷な状況という社会問題を一つの雑誌という言説空間で強烈に打ち出すことを狙った可能性がある。最後にこの両者のやりとりに関する興味深い事例を取り上げて、本稿の締めくくりとしたい。『北と南』の連載終了後、ディケンズがギヤスケルにねぎらいの手紙を書いた、という事実についてはすでに述べたが、その手紙の後半、彼は次のように書いている。

You will not, I hope, allow that not-lucid interval of dissatisfaction with yourself (and me?) which beset you for a minute or two once upon a time, to linger in the shape of any disagreeable association with Household Words. I shall still look forward to the large sides of paper, and shall soon feel disappointed if they don't begin to reappear.

I thought it best that Wills should write the business-letter on the conclusion of the story, [. . .]. I trust you found it satisfactory? I refer to it,

not as a matter of mere form, but because I sincerely wish everything between us to be beyond the possibility of misunderstanding or reservation.
(7 : 513-14)

この手紙を読む限りでは、『北と南』の編集をめぐっては高圧的とさえ思えたディケンズが、かなり下手に出ていることが感じられるだろう。むろん社交辞令も多少は含まれているであろうが、『ハウスホールド・ワーズ』に対して悪い印象を持たないでほしい、と述べるとともに、次の記事を待っている、という趣旨の発言をしていることから、一つには、彼がやはりギャスケルの書く文章を高く評価しており、雑誌にとって欠かせない執筆者と考えていることが窺える。今後も引き続き記事を寄稿してもらうためにも、なるべく彼女の機嫌を損ねたくないという気持ちがあるのだろう。最後に「我々の間に誤解や疑念の可能性がないことを心より祈る」と述べているが、わざわざそのようなことを言うということは、自分たちの関係が、誤解や疑念が生じて仕方のないような状態にあることを彼自身がよく理解していたとも言える。注目すべきは、ディケンズが手紙の中で言及し、「ご満足いただけただけでしょうか？」と尋ねている、ウィルズからのビジネスレターの内容である。ウィルズはその手紙の中で、ギャスケルが『北と南』を自身の出版社を通じて出版する権利を有していることに言及するとともに、“[I hope] it will be satisfactory to you and will not indispose you to a preservation of your association with us” (7 : 514n) と述べて、原稿料として小切手 200 ギニーを送っている。ピルグリム版 *Letters* の编者たちの計算によれば、通常『ハウスホールド・ワーズ』の執筆料は 1 ページにつき 1 ギニーであり、本来ならばギャスケルが受け取る原稿料は 168 ギニーとのことである (7 : 514n)。しかしながら、実際に支払われたのは 200 ギニーであり、差し引き 32 ギニーも多くのお金が彼女には支払われていることになる。その上で「我々と引き続きよしみを」とウィルズが述べていることを考えれ

ば、このお金がいわば彼女への〈迷惑料〉としての意味合いを帯びていることは明白であろう。問題は、これが何に対する迷惑料なのか、という点である。一つには、連載の形態に合わせるために、長くなりがちな彼女の作品をかなり短くすることを強硬に要求したことへの埋め合わせの意味があるだろう。彼女が雑誌への連載という出版形式にいかにもひどく苦しんだかということは、彼女の手紙がよく物語っている。¹⁰ だがそれと同時に、筆者にはこの迷惑料に、編集長ディケンズが自身の戦略ミスを認めたという意味合いも含まれているように思われるのだ。本稿で考察してきたように、ディケンズは労働者の苦難という社会問題を前面に打ち出すために、ギヤスケルの小説と自分の小説とをリンクさせ、その一環として、彼女の作品のタイトルを、より社会小説的趣きの強いものに改変することを求めた。しかしいざ蓋を開けてみると、小説の社会小説的側面が深まっていくにつれて暗さが増し、結果として雑誌の売り上げは落ちてしまった。¹¹ むろん、タイトルがすべてではなく、暗さを生み出した根本的要因は作品の中身にあるのだが、ともかく様々な手段を用いて本作の社会小説的側面を強調する、というディケンズの戦略は、雑誌の売り上げにはマイナスに作用してしまったことが否めないのである。ギヤスケルに支払われた余分な原稿料には、このことへの謝罪の意味も含まれていたのではないだろうか。確かに、そのことを示す直接的な証拠はなく、あくまで推測の域を出ない議論ではある。しかしながら、上述したように、ギヤスケルの『北と南』は結果的

¹⁰ たとえばギヤスケルは1855年1月に友人アンナ・ジェームソンに宛てた手紙の中で、“I have often been in despair about the working of them [the plot and characters] out; because of course, in this way of publishing it, I had to write pretty hard without waiting for the happy leisure hours” (328-29) と述べて雑誌への連載の難しさを吐露しているほか、同じく1月30日付けの手紙においても、“It was the cruel necessity of compressing it [the story] that hampered me.” (331) と、物語を短くせよという要求に苦しんだことを打ち明けている。

¹¹ ディケンズは1854年10月14日付けのウィルズ宛ての手紙の中で、『ハウスホールド・ワーズ』の売り上げの減少に言及し、その原因が『北と南』にあると述べている(7: 439)

に雑誌の売り上げにはあまり貢献できなかった作品である。そのため、同作品をめぐる対立という経緯も併せて考えれば、これを機に二人が袂を分かつことになっても不思議ではない。にもかかわらず、ディケンズは逆に非常に下手に出た手紙を書くとともに、今後も記事の寄稿を期待するという意志をはっきり表明し、そればかりか通常よりかなり多めの原稿料まで支払っているのだ。これは、彼自身に何かやましい意識がある、換言すれば、編集者として戦略を誤り、彼女の作品の足を引っ張る結果となったことに対して罪の意識を持っていることのあらわれではないだろうか。『北と南』のタイトル変更の背後に潜んでいるのは、編集長ディケンズの、必ずしも良い結果に結びつかなかった〈たくらみ〉なのである。

参考文献

- Dickens, Charles. *Hard Times*. Ed. Grahame Smith. London : J. M. Dent, 1994.
- . "It Is Not Generally Known." *Household Words* 2 Sep. 1854 : 49–52.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol.1. Ed. Madeline House and Graham Storey. Oxford : Clarendon, 1965.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol.6. Ed. Graham Storey, Kathleen Tillotson, and Nina Burgis. Oxford : Clarendon, 1988.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 7. Ed. Graham Storey, Kathleen Tillotson, and Angus Easson. Oxford : Clarendon, 1993.
- . "A Preliminary Word." *Household Words* 30 Mar. 1850 : 1–2.
- Gaskell, Elizabeth. *The Letters of Mrs Gaskell*. Ed. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard. Manchester : Manchester University Press, 1966.
- . *North and South*. Ed. Patricia Ingham. London : Penguin, 2003.

- Gillooly, Eileen. "Humor as Daughterly Defense in *Cranford*." *ELH* 59 (1992) : 883–910.
- Jacobson, Wendy S. *The Companion to The Mystery of Edwin Drood*. London : Allen & Unwin, 1986.
- Ledger, Sally. "Gaskell, Elizabeth Cleghorn." *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford : Oxford University Press, 1999, 247.
- Patten, Robert L. *Charles Dickens and His Publishers*. Oxford : Oxford University Press, 1978.
- 青木健. 「『困難な時代』とプレストン・ストライキー階級闘争への序章—」. 『成城文藝』第212号（2009–10）：55–71.
- 加藤匠. 「ある共同作業の痕跡—*Household Words* から読むギヤスケル」. 『ギヤスケル論集』第18号（2008）：49–63.
- 長瀬久子. 「同時代作家—ギヤスケルとの交流を通して」. 『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化—生誕二百年記念』. 松岡光治編. 広島：溪水社, 2011, 575–591.